第一部 ❖ 身心変容技法と霊的暴力

社会心理学の「精神操作」幻想
——グループ・ダイナミックスからマインド・コントロールへ

大田俊寛
埼玉大学非常勤講師／宗教学

1 はじめに——社会心理学への懐疑

オウム問題を迷走させたマインド・コントロール論

私は二〇一一年に『オウム真理教の精神史』を公刊して以降、元オウム信者との対話、オウム後継団体から分派した「ひかりの輪」の現状に関する意見書執筆、高橋克也被告裁判の証人出廷などに携わり、それらを通して、オウム問題の現場に触れるようになった。そうした経験から得られた実感を一言で言うとするなら、オウム真理教が近代に現れたさまざまな新興宗教団体のなかでも、最悪の部類の「破壊的カルト」であったことにまったく異論はないのだが、他方、それに向けられた日本社会の対応の仕方にも、不適切かつ杜撰な点が目立つ、ということである。特に後者は、オウムを暴走させる要因の一つとなったと同時に、現在もなお、オウム問題の順調な解決と終結を妨げているように思われる。

オウム問題への対処に見られる幾つかの懸念点については、すでに別稿で概略を示したため、[1]詳しくは振り返らない。とはいえ、ここであらためて考察しておきたいのは、主に一部の社会心理学者によって提唱されてきた「マインド・コントロール論」についてである。全体として言えばオウム問題とは、「教団が無垢な一般人をマインド・コントロールして入信させた」、あるいは、「教祖である麻原彰晃が信者たちをマインド・コントロールしてテロを遂行させた」というような、単純な構図で分析され得るものではまったくなく、管見の限りでは、マインド・コントロール論を用いてオウムという現象を一貫して説明し得た著作や論文は、一つとして存在しない。[2]また、国内外を問わず、各分野の専門的研究者の多くはマインド・コントロール論に対して批判的・懐疑的であり、その理論を支持したり、何らかの現象の分析に使用したりする者は、きわめて僅少というのが実情である。それにもかかわらず日本社会においては、「オウムと言えばマインド・コントロール」という通念が少なからず残存している。

私もオウム研究を始めた当初は、マインド・コントロール論に内在する諸問題について、十分に自覚的ではなかった。とはいえ、オウム問題の現場でしばしばそれが持ち出され、奇妙な「説明」や「対策」が示されるのを幾度も見るにつれて、一体この理論は何なのか、その空虚さにもかかわらず、社会心理学者はなぜこれに拘泥し続けるのかということに関して、強い疑問を抱くようになった。

自己啓発セミナーを生んだ社会心理学

社会心理学と「カルト」の関係については、実はもう一つ気になる点がある。私は、オウム真理教を含むさまざまな現代宗教を研究する過程で、自己啓発セミナーの歴史についても一通り調べたことがあったのだが、それについて論じた書物は概して、自己啓発セミナーの直接的な起源は、クルト・レヴィ

ンが考案した「感受性訓練」にあると述べていた。後に見るようにクルト・レヴィンは、「アクション・リサーチ」や「グループ・ダイナミックス（集団力学）」の提唱者であり、その業績によって「社会心理学の父」とも称される人物である。

周知のように自己啓発セミナーは、一九六〇年代から八〇年代に掛けて世界的なブームを巻き起こした。しかし、そこで行われる精神操作や人格改造の手法が過激化することにより、さまざまな団体が「カルト」化していったという経緯がある。同時にそれは、ニューエイジや精神世界の運動とも合流しながら、周囲の諸宗教にも大きな影響を及ぼした。例えばオウム真理教においては、「観念崩し」という名目で多くの理不尽な修行が実践されたが、こうした用語や考え方は大枠として、自己啓発隆盛の流れから生じたものと見ることができるだろう[3]。

現在、社会心理学は、マインド・コントロール論を唱えることにより、人々をカルトから解放（脱カルト）する理論を提供する存在として認知されている。ところが、約百年間にわたる社会心理学の歴史を振り返ってみると、むしろそれは「カルト的思考法」と奇妙に親和的なのではないか、さらには、「カルトの生みの親」となった側面もあるのではないか、ということを疑わざるを得ない。

こうした問題意識から社会心理学の歴史を辿り直すということが、本稿のテーマとなる。最初に結論を言えば、社会心理学においては、人間の「受動性」、すなわち、人間が周囲の環境から「影響を受ける」存在であることが重視されるが、しばしばそのことが過度に強調される嫌いがあり、そうして作り上げられた「受動的人間像」が、さまざまな極論や偏見を生み出してきたのではないか、と思われるのである。

とはいえ私自身は、社会心理学に関してはあくまで門外漢の一人であり、それについての勉強や研究も、未だ十分であるとは言えない。その意味で本稿は、今後の議論を喚起するための暫定的な試論という位置を占めるに過ぎない。

2 社会心理学の形成

群衆心理学の登場——近代人の受動性

あらためて言うまでもないことだが、人間は本質的に、能動性と受動性という二つの側面を備えた存在である。すなわち人間は、自らの理性や意志に基づき、能動的に行動・判断することもあれば、社会や集団からの影響を受けて行動したり、判断を他者に委ねたりすることもある。

近代以前の社会においては、何らかの伝統的慣習や宗教的規範に受動的に従うことが、人間の美徳と捉えられるケースが多かった。ところが近代においては、価値観が大きく転換し、人間の能動性が肯定的に評価されるようになった。例えばイマニュエル・カントは、人間の主体性の基礎を「自律（Autonomie）」の原理に見出し、自らの理性と意志に基づいて法を作り、自らそれを遵守するという営為が、社会制度や倫理の根幹に置かれるべきことを主張した。こうした思想は、人間の能動性を重視する啓蒙主義的な近代思想の典型例と見ることができるだろう。

とはいえ、それはあくまで一つの理想論であり、必ずしも常に、現実がそうであったというわけではない。近代においては、社会システムが高度に複雑化したため、個人がその全容を十分に把握した上で適切な能動性を発揮することは、実際にはきわめて困難となった。自分なりの仕方で社会の構造を見通し、それを踏まえて主体的に生きようと足掻くよりも、余計なことは考えず、国や会社からの指示に盲目的に従っていた方が遥かに楽である——こうした受動的思考法が近代人の処世術の一つとなっていったことは否定できないだろう。近代は実は、歴史的に比類のないレベルで人間の受動性が拡大した時代でもあったのである。

一九世紀末に登場した「群衆心理学」は、近代人に見られる受動的性質を主な考察対象としている。ギュスターヴ・ル・ボンは、『群衆心理』（一八九五）という著作において、フランス革命やナポレオン台頭時に群衆が示した熱狂に関する分析を試みた。ル・ボンによれば、人々は群衆を形成すると、個人として有しているはずの理性的能力や道徳的観念を著しく減退させ、単純な感情によって全体が染め上げられる。彼らはもはや、複雑な事柄を理解することができず、暗示に掛かりやすい状態になり、カリスマ的な指導者が発する無根拠な断言を易々と受け入れてしまうのである。

次に、社会学者・精神分析学者のエーリッヒ・フロムは、『自由からの逃走』（一九四一）において、ナチズムの運動に雪崩（なだ）れ込んでいった群衆の心理を解明しようとした。フロムによればヨーロッパ人は、ルネサンス、宗教改革、市民革命を通じ、自由を獲得するための闘いを続けてきた。多くの人々は、自由を求めて自らの命さえ投げ出したのである。ところが、いったん近代的諸制度が確立し、自由な環境が当たり前のものとなると、人々はむしろそれを重荷に感じ、自由から「逃走」しようとし始める。群衆は、自らを理不尽な仕方で締め上げる権威主義的な

人物を「魔術的な助け手」と見なし、その姿に神秘的なオーラを認め、彼に全身全霊で帰依・依存することに快楽を感じるようになるのである。[4]

実験社会心理学の始まり――クルト・レヴィンの経歴

群衆心理学が発見したのは、人間が集団状態において受動的な存在に変容する傾向がある、ということであった。そして社会心理学は、こうした知見を継承すると同時に、そこに実験的手法を導入し、集団状態の人間心理をより精密に分析しようとしたのである。実験社会心理学の基礎を作り上げたのは、先にも述べたクルト・レヴィンであるため、まずは彼の経歴を振り返るところから始めよう。

レヴィンは一八九〇年、プロイセンのモギルノ（現ポーランド領）で、ユダヤ人の家系に生まれた。その後、ベルリン大学で心理学を専攻し、博士号を取得する。当時の心理学界において支配的であったのは、J・B・ワトソンが提唱した行動主義の心理学であったが、レヴィンはその流れに対抗するゲシュタルト心理学に属していた。行動主義心理学が、心理学の対象を客観的に観察可能な諸行動に限定しようとしたのに対して、ゲシュタルト心理学は、人間心理を把握する際に内面への考察が欠かせないこと、それが一連の「形態（ゲシュタルト）」的な構造によって組み立てられていることを主張したのである。

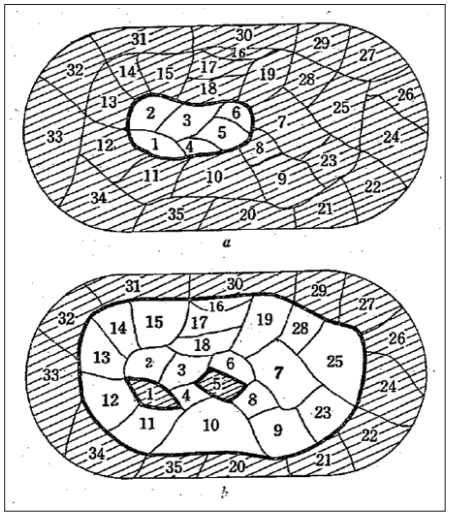

図1　子供と成人の自由空間の比較
（レヴィン『社会科学における場の理論』138頁より）

さらにレヴィンは、ゲシュタルト心理学を応用し、個人の内面のみならず、集団によって形成される「場」のなかにもさまざまな形態が存在すると唱え、それに関する分析を「場の理論（field theory）」と呼んだ。彼はトポロジー数学やベクトルの概念を援用することにより、場の構造や関係性を記述しようと試みたのである。彼が執筆した諸論文には、上のように、「場」の形態を表現するための図式が数多く掲載されている。

レヴィンはベルリン大学において、場の解析や組み換えを可能とする実験方法を模索していたが、中途で研究を打ち切らざるを得なくなる。というのは、一九三三年にナチスが政権を掌握したため、ユダヤ系であった彼は、アメリカへの亡命を余儀なくされたからである。

レヴィンは新天地のアメリカでも精力的に研究に従事し、社会心理学の発展と普及に努め、一九三五年にアイオワ大学の教授に就任、四四年にはマサチューセッツ工科大学で「グループ・ダイナミックス研究所」の創設に携わった。理想的な環境を確保し、本格的な活動はこれからというところであったが、三年後の一九四七年、彼は突然の心臓発作に見舞われ、五六歳で命を落とした。

グループ・ダイナミックスの基本モデル――溶解・移動・凍結

唐突に訪れた死のために、レヴィンの研究期間は限られたものとなったが、彼はそのなかでもさまざまな実験を試み、多くの論文を残した。アメリカにおけるレヴィンの代表的な研究には、以下のようなものがある。[5]

（1）アクション・リサーチ

単に社会状況を観察するのではなく、改善に向けた行動を常に起こしながら調査を行う。彼はその手法に基づき、工場内の労使関係の調停、地域社会の人種差別問題の解決などに取り組んだ。

（2）リーダーシップ実験

一一歳の子供たちに、「専制型」「民主型」「放任型」にタイプ分けされたリーダーを配し、お面作りなどの課題に取り組ませた。それにより、「民主型」のリーダーがもっとも望ましい結果を生むことが明らかになった。

（3）集団決定法

戦時中のアメリカでは、肉不足の解消のため、動物の内臓を食べることが求められた。住民たちの食習慣を変える方法として、内臓料理の利点を教える「講義法」と、内臓料理に取り組むことを集団のなかで宣言する「集団決定法」を試し、後者の方が効果が高いことを示した。

この他にもレヴィンは、さまざまな概念や実験法を提唱したが、それらはすべて、人間心理を集団的に取り扱うことに多くのメリットが認められる、という見解に基づいていた。すなわち、人間の心理を個人として捉えようとすると、その内実はきわめて流動的で曖昧模糊としており、容易には客観的に把握することができないが、心理を集団的に取り扱い、実験を行えば、そこで生じる変化を数量的なデータとして取り出すことが可能となる。同時に人間の心理には、集団から被る力や作用によってもっとも影

響されやすいという性質が見られる。実にレヴィンは、集団心理の分析や実験に基礎を置くことによって、科学という概念自体が一新され、「社会諸科学の統合」が可能になるとさえ考えたのである。[6]

マサチューセッツ工科大学に設立された機関の名称にも現れているように、レヴィンの研究の全体像は、「グループ・ダイナミックス（集団力学）」という概念に集約されるだろう。彼は一九四七年に著した「集団力学の開拓線」という論文において、グループ・ダイナミックスにおける集団心理の変容が、「溶解・移動・凍結」という三つのステップに従って生じることを論じている。[7] すなわち、集団内の所与の思考法には必ず一定の傾向性が見られるが、まずはそれを「溶解（unfreezing）」させる。次にその水準を、望ましい方向に「移動（moving）」させる。さらには、こうして獲得された新しい水準を「凍結（freezing）」させ、安定的・永続的なものへと仕立て上げてゆくのである。

社会心理学もまた、群衆心理学と同様、集団状態において人間の受動性が高まるという点に注目している。とはいえ、レヴィンによって実験的手法が導入された結果、受動性に対する両者のスタンスは、実質的に大きく異なるものとなっている。すなわち群衆心理学が、集団状態における人間の姿を外部者として観察・記述することに留まるのに対して、社会心理学は、集団的な圧力を巧みにコントロールすれば、人間の性格や関係性を意図的に変容させられるはずだ、と考えたのである。果たしてこういったアイディアがいかなる帰結をもたらしたのか――そのことを、引き続き追ってゆかなければならない。

3 自己啓発セミナーへの展開

感受性訓練

先述したようにレヴィンは、グループ・ダイナミックスの最初のステップを「溶解」と位置づけ、「自己満足や独善の殻を破るためには時々情緒的な動揺を慎重に起すことが必要である」[8]と主張した。社会心理学において、旧来の思考法や固定観念を溶解させ、集団内にダイナミズムを生じさせるためのトレーニング法は、特に「感受性訓練（Sensitivity Training）」と呼ばれている。

感受性訓練の起源については、ある印象的なエピソードが伝えられている。[9] 一九四六年にレヴィンは、コネティカット州の人種関係委員会から、人種的・宗教的偏見を解消するための有効な対策や、指導者の訓練方法を考案することを求められた。そこで約四〇名の参加者を集め、二週間の研修を行うことになったのである。

ところが研修中のある夜、スタッフたちがデータを整理するための会合を開いていると、数名の参加者が偶然その場を訪れた。そして彼らは、スタッフの報告が実情と異なることを指摘し、データに異議を唱え始めたのである。この出来事は言わば、偶発的に生じたルール破りであったわけだが、こうした議論を交わすことによって特別な刺激が生まれ、その後の研修が活力に満ちたものとなった。感受性訓練の根幹に置かれているのは、参加者たちが自身の社会的地位や役割に関係なく、互いの見解を率直に「フィードバック」し合うという行為なのだが、こうした出来事を通して、その原理が発見されたわけである。

感受性訓練は一般に、自我の防衛機制を解除して柔軟な感受性を取り戻し、「今ここ」の現実に生きること、偏見や固定観念に囚われずに他者との肯定的な関係を取り結ぶことを目的に行われる。[10] 訓練においては全般的に、面識のない人々が数日間の研修を共にし、テーマの設定されていない議論に身を委ねる。参加者の外見や人柄、議論の際の発言や振る舞い、過去の経験や生育歴についての告白などは、絶えず「フィードバック」に晒され、それにより参加者は、自分が他人からどのように見られているか、人間関係においてどのような固定観念に囚われているかを自覚するようになる。社会心理学は、集団内で相互にフィードバックを行わせ続けることによって、参加者の人格を「溶解」させられるということを発見したのである。

エンカウンター・グループ

レヴィンの死後、グループ・ダイナミックスや感受性訓練の手法は、社会心理学の枠を越えて広く普及していった。その際の導き手となったのは、臨床心理学者のカール・ロジャーズという人物である。

ロジャーズは一般に、「非指示的カウンセリング」や「来談者中心療法」の提唱者として知られている。すなわち、カウンセラーが治療の方向性や目的を決定するのではなく、クライエントの話を傾聴することに重きを置く、という手法である。グループ・ダイナミックスや感受性訓練においても、テーマや目的を定めずにひたすら会話を交わすということが行われるため、ロジャーズから見るとそうした手法は、自らが実践してきた心理療法を集団に応用したものと受け止められたのかもしれない。

ロジャーズはそのような集団療法を、「エンカウン

ター・グループ（出会いの集団）」と名付けた。エンカウンターとは、「ふたりの人間がしばらくの間お互いに相手の眼を通して世界を眺め、そして相互理解を通して、本当の意味で関係をもとうとしているときの、人間と人間の対決であり、出会いである」[11]と説明される。こうした濃密な人間関係を集団的に成立させようとするのが、エンカウンター・グループということになる。

著名な心理学者であったロジャーズが旗振り役を務めたこともあり、エンカウンター・グループの実践は、急速な勢いで社会に普及した。しかし、それとともに目立つようになったのは、自我の防衛機制を撤廃し、人間同士の「本当の出会い」を体感させようとする手法が、次第に過激で暴力的なものと化すという現象であった。例えば、一九七一年に公刊されたR・シロカ他編『グループ・エンカウンター入門』という書物には、次のような実践法が列挙されている。数日間にわたってほとんど休憩を取らず、睡眠さえ制限しながら研修を続ける「マラソン・グループ」。参加者全員が着衣を脱ぎ捨てて会合を行う「ヌード・マラソン」。あるいは、暴力的な言葉で互いの人格を攻撃し合う「アタック・アプローチ」[12]などである。こうして参加者たちは、人里離れた合宿所で非日常的なコミュニケーションに耽り、互いの仮面を引き剥がし合いながら、自我の溶解を体験していったのである。

ヒューマン・ポテンシャル運動

感受性訓練から発展したエンカウンター・グループの運動は、「ヒューマン・ポテンシャル運動」[13]というニューエイジ系の潮流と結合し、さらなるポピュラリティを獲得していった。その経緯は、W・T・アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒――人間の可能性への挑戦』という書物に詳しいが、ここで大枠の流れを確認しておこう。

ヒューマン・ポテンシャル運動の創始者に位置づけられるのは、心理学者のアブラハム・マズローと、作家のオルダス・ハクスリーである。マズローは人間の生を、段階的に「真の自己」を実現してゆくプロセスと捉え、最終的な自己実現のためには、神秘体験や至高体験が不可欠であると唱えた。また、『すばらしい新世界』（一九三二）という小説で知られるハクスリーは、後にインド哲学や神秘主義への傾倒を深めるとともに、ドラッグの服用をも体験し、人間の能力の大部分が眠り込んだ状態にあることを確信するようになった。彼は『知覚の扉』（一九五四）という評論において、サイケデリック体験に基づく精神の覚醒について論じ、またアメリカのさまざまな大学で「人間の可能性の開発」をテーマとした講演を行ったのである。

マイケル・マーフィーとリチャード・プライスという青年は、マズローの自己実現論やハクスリーの精神覚醒論に共鳴し、一九六二年、カリフォルニア州の温泉地であるビッグサーに、人間性を成長させるためのセンターとして「エスリン研究所」を創設した。同所では、以降のニューエイジ運動に引き継がれる多様な実践が試みられたが、その柱に据えられたのは、前項で見たエンカウンター・グループの他、ゲシュタルト療法、ボディワークの三つであった。[14]すなわちゲシュタルト療法とは、精神科医フレデリック・パールズがゲシュタルト心理学を発展させて考案した新しい精神療法であり、「今ここ」に意識を集中させることにより、断片的な自己を克服し、統合された人間、覚醒した人間となることを目指す。そしてボディワークにおいては、瞑想、ヨガ、座禅、太極拳、アレクサンダー・テクニークなどが試みられた。要するに、エンカウンター・グループという集団療法に、各種の精神療法や身体療法を加味した諸実践が繰り返されたわけである。

エスリン研究所は、「真の自己実現」や「潜在能力の開発」を目指して、ヴァラエティに富んだ活動を展開し、ニューエイジの重要な発信源の一つとなった。しかし他方、活動が深まりを見せるにつれて、さまざまな負の側面も現れた。同研究所は公式にはドラッグの使用を禁じていたが、実際にはLSDの常用者に溢れ、当局から麻薬摘発の警告を受けるたびに、スタッフは大量の薬物を海に投棄しなければならなかった。さらに、エンカウンター・グループの手法が過激化し、暴力が振るわれることも少なくなかった。そうしたワークショップのなかで精神状態を悪化させ、自殺する者も現れた。また間接的な仕方ではあれ、シャロン・テート殺害事件を起こしたマンソン・ファミリーや、オレゴン州に巨大なコミューンを築いて騒動を起こしたラジニーシ教団など、「破壊的カルト」と称される団体との関係性も生じた。[15]人間精神の革新を目指したヒューマン・ポテンシャル運動は、次第に歪んだ側面を呈するようになったのである。

自己啓発セミナー

一九七〇年代に入ると、ヒューマン・ポテンシャル運動は、さらに別種の流れと結びついてゆく。同運動は本来、少人数単位で行われる非営利的な活動を基調としていたが、その手法を応用して、大人数が参加可能な営利目的のセミナーを主宰する人々が現れたのである。そうした変化を主導したのは、一

九七一年に「ＥＳＴ（エスト）（Erhard Seminars Training）」を創設した、ウェルナー・エアハルトという人物である。

エアハルトはもともと有能なセールスマンであったが、アメリカ西海岸に転居してニューエイジ系の諸文化に触れ、それらを貪欲に吸収していった。[16] 彼が学んだのは、ヒューマン・ポテンシャル運動の他、ポジティブ・シンキング、セルフ・ヘルプ、神智学、サイエントロジーの思想などであった。また、アレクサンダー・エヴァレットが創始した「マインド・ダイナミックス」のインストラクターを務め、ホセ・シルバが考案した自助グループのプログラム「シルバ・マインドコントロール」[17] にも参加した。エアハルトは、こうした諸実践に見られる知識や技術を巧みに組み合わせながら、自己啓発セミナーの大規模な組織化を企図したのである。この後、通信販売、ネットワーク・ビジネス、社員教育などの関係者が続々と同分野に参入するようになり、集団精神療法の大衆化・商業化・マニュアル化が進行していった。

このような流れの影響は、少し遅れて日本にも及んだ。一九六〇年代以降、立教大学キリスト教教育研究所や産能短期大学を中心に、教育や企業の世界に感受性訓練を普及させることが推進され、また八〇年代以降には、バブル景気の時流に後押しされながら、各種の自己啓発セミナーが大衆レベルでも流行するようになった。他方で、こうしたセミナー組織が暴力化・カルト化するという現象も見られ、「ライフスペース」や「ホームオブハート」などの事件が引き起こされていったのである。こうした事象については、ここでは詳論する余裕がないため、関連書籍の記述に委ねることにしよう。[18]

4 精神操作の失敗と「カルト」化

レヴィンの構想の問題点

以上、社会心理学者クルト・レヴィンが提唱したグループ・ダイナミックスの理論に始まり、自己啓発セミナーが興隆するまでの経緯を、やや駆け足で概観してきた。そこに見られるのは、自我の防衛機制の解除を目的として行われる感受性訓練という技法の周囲に、人と人との本当の出会い、自己実現や潜在能力開発、商業主義的な人材育成といった数々の要素が付け加えられ、大衆的なムーブメントにまで広がってゆく光景である。同時にそこには、集団精神療法の暴力化や反社会化、さらには「カルト」化といった現象が、常に付随して起こっていたわけである。

それを確認した上で、あらためて問わなければならないのは、果たしてこういった現象が何に起因するのか、ということである。当初レヴィンが目指していたのは、人種問題や労使問題の解決であったわけであるから、その後に他分野で発展した集団療法が暴力化・カルト化したことに対して、社会心理学が責を負わなければならないはずはないというのも、一つの言い分としては成立するのかもしれない。

とはいえ私は、そうは思わない。集団療法が発展し、社会に普及してゆくなかでも、レヴィンが唱えた「溶解・移動・凍結」の図式、さらには、「フィードバック」を用いて精神構造に揺さぶりを掛けるという手法は維持され続けたわけであり、総体として見ると、レヴィンとその後の社会心理学者が前提としてきたグループ・ダイナミックスの図式自体に、何らかの問題があったと考えるべきではないだろうか。ここでは雑駁ながら、上記の図式に対して三つの批判点を提示してみたい。

（1）そもそも、可能なのか？

先述したようにレヴィンは、「溶解・移動・凍結」の図式に基づき、集団と個人の心理構造を意図的に変容させることができると考えた。しかしそもそも、こうしたことは本当に文字通りに可能なのだろうか？もしそうなのであれば、人種問題、宗教問題、労使問題を始め、社会に何らかの問題が生じた場合、社会心理学的な手法を講じることによって、直ちに改善・解決することができるはずである。しかし、レヴィンの死から約七〇年経った今でも、そのような話はほとんど聞いたことがない。またレヴィンが唱えた、グループ・ダイナミックスを基盤とする「社会諸科学の統合」という目標も、実現の兆しすら見えてこない。上記の図式は一見したところ、科学に裏づけられた夢のある構想に思われたが、実際には多分に幻想的なものだったのではないか。

（2）暴力性のエスカレートという問題

「溶解・移動・凍結」のプロセスは、参加者自身がそうした変化を望んでいる場合には、比較的順調な進展を見せることもあるが、特にそうでない場合には、なかなか思うように進行しない。そのため、まずは自我を「溶解」させること、防衛機制を撤廃することが目指されるようになり、結果として感受性訓練を始めとする各種の集団療法においては、精神的・物理的な暴力がエスカレートしていった。そのような暴力に晒された者は、それによって人格の「変容」のプロセスが始まったと思い込んだが、実際に起こっていたのは、正確に言えば人格の「崩壊」で

あり、その後にしばしば、PTSDや解離の症状に見舞われた。また、強烈な「変容体験」が中毒化し、「セミナー依存症」に陥る者も続出した。

（3）正しい方法と言えるか？

百歩譲って、社会心理学的な手法による精神操作や人格改造が可能であり、それに基づく諸問題の解決が可能であるとしよう。とはいえ、そういった手法に頼るのは、果たして正しいと言えるだろうか？何らかの問題を起こしたり、反社会的な思想に染まったりすると、「集団精神療法センター」といった施設に収容され、人格改造を施されて帰ってくる……。そうなればもはや、全体主義的な思想統制と大差がなくなってしまうだろう。レヴィンの研究の主な動機は、ナチズムを生み出したような人種差別の問題を解決することにあったが、彼が提示した解決策は実は、「裏返しの全体主義」という性質を帯びていたのではないか。またその理論においては、意図しないうちに、人間に備わる主体性や自律性という側面が軽視・捨象されていたのではないか。

（1）客観的に認められた制度や事実以上に、主観的な心情や体験が重視される。（心理や体験の偏重）

（2）カリスマや生き神として崇拝される人間が、絶対的な決定権を持つ。（指導者崇拝）

（3）世界が善と悪に二分される。（二元論的思考）

「カルト」化を呼び込む構造

次に、「カルト」化という問題についても手短に考察してみよう。カルトという用語や概念は、未だ厳密には学問的なものと認められておらず、またその意味内容も、論者によってそれぞれ異なるというのが実状である。これに対して私は現在のところ、カルトに見られる大まかな特色として、上のような三点が挙げられるのではないかと考えている。[19] そして先述のグループ・ダイナミックスの図式は、文字通りに遂行しようとすればカルトを生み出してしまうような構造を備えていたのではないだろうか。各項目に即して説明すれば、社会心理学的な集団療法においては、

（1）それまでの思考傾向や固定観念が「溶解」するという体験が、精神変革のために不可欠なものと見なされ、重要視された。

（2）訓練においては、全体のプロセスや最終目的が明示されないため、トレーナーやファシリテーターに位置する人間が、過分な主導権を掌握するようになった。また、参加者たちを劇的な体験に導くことが巧みなトレーナーがカリスマ視された。

（3）訓練を受けることで「柔軟な感受性」「開かれた精神性」を獲得したとされる人間と、そうではない人間が、二元的に区別されるようになった。

という点で、カルト的傾向性への接近が起こったと思われる。

今から振り返れば社会心理学は、グループ・ダイナミックスの基本図式に潜む問題点、すなわち、「溶解・移動・凍結」に基づく精神操作が科学的・普遍的に可能であるとは到底言えないこと、また、それを無理に推進すれば副作用のような形で暴力化やカルト化が生じることについて、立ち止まって再考するべきであった。とはいえ遺憾ながら、そうしたことが行われた形跡は、管見の限りではほとんど存在しない。[20] 他方、一九八〇年代後半以降になると、高度成長の終焉やバブル崩壊に伴い、感受性訓練や自己啓発セミナーの流行は下火になっていったのだが、ちょうどその頃から一部の社会心理学者は、人々を「マインド・コントロール」する「カルト」という存在を自らの外部に見出し、奇妙な捻れを帯びた批判活動を展開するようになったのである。その経緯を、引き続き追うことにしよう。

5 マインド・コントロール論の構造

マインド・コントロール論の普及

「マインド・コントロール」という言葉がいつどのような仕方で登場したのかということは、正確には明らかではない。[21] とはいえ、それが広く知られる契機になったのは、統一教会の脱会者であるスティーヴン・ハッサンが一九八八年、反カルト・脱カルトの理論書として『マインド・コントロールの恐怖』を公刊したことである。同書は日本でも九三年に翻訳が出版され、それによってマインド・コントロール論は、霊感商法や合同結婚式で世間を騒がせていた統一教会に対する批判理論として、人口に膾炙していった。また、オウム真理教による地下鉄サリン事件が起こった九五年には、社会心理学者の西田公昭が『マインド・コントロールとは何か』を出版し、オウムに関してもマインド・コントロール論を用いて説明するということが一般化した。

このようにマインド・コントロール論は、「カルト」への恐怖や嫌悪を推進力とすることにより、急速に社会に普及した。とはいえ、その後は目立った議論の進展が見られず、同時に、理論面・実践面からのさまざまな批判も向けられるようになった。[22] こ

こではそうした批判を前提としつつ、マインド・コントロール論の全体的構造について再考することにしたい。

洗脳の技法を洗練させたもの？

マインド・コントロールについて論じられる際、その端緒として位置づけられるのは、中国で行われた「洗脳」の研究である。一九五〇年代の中国においては、共産主義に反する人間を特定の施設に強制隔離し、思想改造を施すことが試みられた。精神医学者のロバート・リフトンは、『思想改造の心理――中国における洗脳の研究』（一九六一）において、そこから解放された人々に詳細な聞き取りを行い、彼らが経験した心理的プロセスを叙述した。それによれば、中国による洗脳＝思想改造は、左のような八つの基本方針に則って行われた。収容者たちは、さまざまな物理的・精神的暴力に晒されながら、共産主義者に転向することを強要されたのである。

それでは、こうした操作の結果、収容者は共産主義者に生まれ変わったのだろうか。リフトンはそれについて、「彼らを説得して、共産主義の世界観へ彼らを変えさせるという観点からすると、そのプログラムはたしかに、失敗だと判断せねばならない」と記す。[23] 実にリフトンが面談した二五人のうち、共産主義に転向したのはわずか一人であり、彼らの多くは収容所を出ると間もなく、従来の価値観や信条に戻っていった。このように一九五〇年代の中国においては、国家権力があらゆる手段を尽くして「思想改造」を試みたわけだが、その企図は達成されなかったのである。[24]

ところが多くのマインド・コントロール論者は、洗脳をマインド・コントロールの先行形態と位置づけながらも、その試みが結局のところ失敗であったことを明確に説明しようとしない。[25] 彼らはそれを曖昧にしたまま、マインド・コントロールは洗脳よりも「もっと巧妙で洗練されている」[26]と話を進める。それでは果たして、マインド・コントロールとは何なのだろうか。国家権力によってさえ成し遂げられなかった精神操作は、いかにして「可能」となったのか。

マインド・コントロールの基本モデル――解凍・変革・再凍結

スティーヴン・ハッサンは、マインド・コントロールの概要を次のように説明する。「マインド・コントロールは、露骨な物理的虐待は、ほとんど、あるいはまったくともなわない。そのかわり催眠作用が、グループ・ダイナミックス（集団力学）と結合して、強力な教え込み効果をつくりだす。本人は、直接おどされるのではないが、だまされ、操作されて、決められたとおりの選択をしてしまう。だいたいは、自分に対し行われたことへ積極的に応答してしまう」。[27] すなわち、グループ・ダイナミックスという社会心理学的技法を用いることによって、物理的な虐待や脅迫を伴わずに、精神の操作が可能になるというのである。

ハッサンによれば、カルトによるマインド・コントロールは、「解凍・変革・再凍結」という三段階のプロセスを介して行われる。言うまでもなくこれは、クルト・レヴィンが示した図式に即したものだが、ハッサンはそれぞれの段階を次のように説明する。[28]

（1）解凍（unfreezing）
対象となる個人に急激な変革を起こさせるためには、まずはその人の現実を揺さぶり、人格を崩壊させなければならない。その際には、睡眠を奪う、食事を制限する、人里離れた施設に収容する、瞑想に誘導する、個人的な秘密を告白させる、苛烈な個人攻撃を加える、といった諸手段が用いられる。

（2）変革（changing）
古い人格が崩壊したことによって生じた空白に、新しい人格を植えつける。その際の典型的な手法は、形式ばった教えを幾度も反復させ、催眠状態に導くことである。また、新入会員を小グループへと振り分け、自らの役割を自覚するように仕向ける。

（3）再凍結（refreezing）
新しい人格の定着を図る。新規のメンバーは、常

（1）環境コントロール
日常の環境から引き離し、完全な監視下・支配下に置く

（2）神秘的な人間操作
自分たちの行動は高尚な目的に向けられているという、神秘的な雰囲気を漂わせる

（3）純粋さの要求
イデオロギーに反する思想・感情・行動を徹底して排除する

（4）自白信仰
これまでに犯した罪をすべて告白させる

（5）聖なる科学
自分たちのイデオロギーは一点の誤りもない完璧な科学であるという権威づけを行う

（6）荷重言語
善悪に関して簡潔な決まり文句を設定し、それを越えた探求を禁止する

（7）人間を超えたドクトリン
過去の歴史的事実を、神話性を帯びた教義に一致するよう改変する

（8）存在の分配
存在権を持つ者とそうでない者とのあいだに明確な一線を引く

に古参のメンバーと行動し、彼を見習うよう強いられる。メンバー同士の交わりによってこそ「真の家族」が生まれると説かれ、人格の再凍結を促進するために新しい名前を与えられることもある。その後は多くの場合、新入者を勧誘する任務に就き、それを通して自らの信念を固めてゆく。

マインド・コントロールはその他にも、多くの社会心理学的テクニックを用いて推進される。ハッサンが言及しているのは、レオン・フェスティンガーの認知不協和理論、スタンレー・ミルグラムの服従実験、ロバート・チャルディーニの影響力論などである。このように、マインド・コントロール論は全体として、グループ・ダイナミックスの「解凍・変革・再凍結」図式を中心に置きつつ、その周囲にさまざまな社会心理学的テクニックをパッチワーク状に配することによって構成されている、と見ることができるだろう。

日本の社会心理学者である西田公昭の議論も、大枠の構造は、ハッサンのそれと変わらない。西田は、「破壊的カルトのマインド・コントロールとは、他者が自らの組織の目的成就のために、本人が他者から影響を受けていることを知覚しないあいだに、一時的あるいは永続的に、個人の精神過程（認知、感情）や行動に影響を及ぼし操作すること」[29]と定義する。また彼はマインド・コントロールを、「ビリーフ・システムの変化」、すなわち、古い信念体系が新しい信念体系に置き換えられることと説明し、その有り様を上のように図示する。[30]それによれば、従来の信念体系を構成していた諸要素が徐々に解体され、新しい諸要素を中心とするものへと再構築されるのである。若干の修正が施されてはいるものの、この構図も基本的には、クルト・レヴィンが提示した「解凍・変革・再凍結」の図式に沿うものと見ることができるだろう。

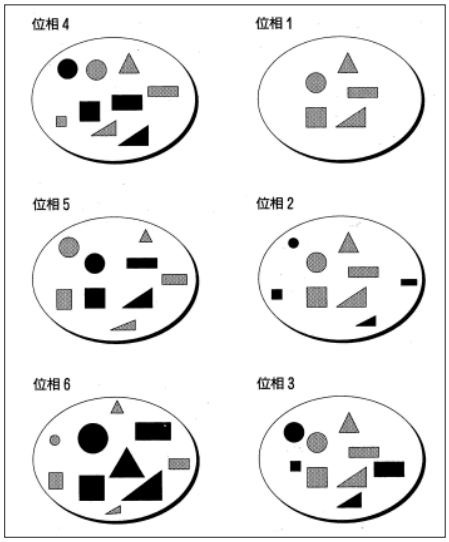

図2　ビリーフ・システムの変化

それでは、マインド・コントロール＝「ビリーフ・システムの変化」は、いかにして達成されるのか。再びハッサンと同様に、そこで持ち出されるのは、社会心理学系の多種多様な理論や実験である。西田によればマインド・コントロールは、認知不協和理論や影響力論の他、ヴァーノンの感覚遮断実験、フィリップ・ジンバルドーの監獄実験、プライミング効果論など、社会心理学に関連した各種のテクニックを駆使することによって遂行されるという。

マインド・コントロール論の矛盾や問題点

ハッサンや西田の著作に見られるように、マインド・コントロール論は概して、「カルト」と目される諸団体にまつわる多種多様な事例を引き合いに出し、それらに関して、同じく多種多様な社会心理学的テクニックを参照しながら説明する、という構成が取られる。結果的にその論述は、断片的な記述を数多く列挙してゆくスタイルとなり、論旨を正確に追うことが難しいため、読者は読んでいるうちに何となく「カルトがマインド・コントロールしているのかもしれない」と思わされやすい。また、「カルトは密かにこんな卑怯なことを行っているのか」と、義憤にも駆られてしまう。とはいえ、その理論が本当に「カルト」への入信動機やその活動実態を正しく捉えているのかと再考してみると、疑わしい点が少なからず浮かび上がってくる。その幾つかについて、以下に述べてみよう。

（1）カルトのみならず、宗教的回心の全般に当てはまることなのでは？

まず、もっとも大きな枠組みから考察してみよう。マインド・コントロール論では、さまざまな社会心理学的テクニックが用いられることにより、信念体系に変化が生じる、と説かれる。とはいえそうした事態は、「カルト」のケースのみならず、宗教的回心の全般に見られることなのではないだろうか。すなわち、多くの宗教においては、諸種の勧誘や布教によって新たな入信者を獲得し、彼に教義の学習や修行の実践を課すことにより、旧来の信念体系をその宗教に沿ったものに変容させることが試みられる。言うまでもないことだが、その際に入信者は、回心を遂げた後、具体的にどのように精神状態が変化するのかについて、事前に了解しているわけではない。マインド・コントロール論はもっぱら「カルト」の活動を批判的に分析するために考案されたものなのだが、果たしてその特色を的確に抉り出すことに成功しているだろうか。

こうした議論において、マインド・コントロール論者はしばしば、マインド・コントロール自体は良くも悪くもない、カルトがその技術を「悪用」して

いることが問題だ、と主張する。[31] とはいえこれは、明らかに理屈が通らない。もしそうであるなら、カルトに対する批判として行うべきことは、そうした団体に見られる教義や活動の問題点を具体的に吟味することになるはずであり、あえてそこにマインド・コントロール論を持ち出す意義自体が消滅してしまうだろう。

（2）そもそも、可能なのか？

次に、やや詳細な部分に踏み込んでみよう。マインド・コントロール論を文字通りに受け止めれば、人は巧妙に精神を操作されることにより、ほとんど意識しないうちにカルトの一員となり、さらには、無自覚なまま霊感商法やテロリズムといった反社会的行為にさえ手を染めるようになるという。果たしてそのようなことは、本当に可能なのだろうか？

現実的には、本人に動機・関心がないにもかかわらず、カルト的団体に加入するということは、少なくとも管見の限りでは、まったくあり得ない。実際には多くの人々は、神は本当に存在するのか、人は死んだらどうなるのか、などの問題を探求するため、近代医療から見放された病気や怪我を治癒するため、険悪化した家族関係から逃れるため、学校で得られなかった真の友人を作るため、物質的充足とは別次元の幸福を実感するため、といったさまざまな願望や動機を抱きながら、カルトに接近・入信してゆくのである。団体側の勧誘方法がきわめて巧妙であり、ときに詐欺的でさえあったというのも、大きな要因としてはあり得るが、[32] それはあくまで副次的なものの一つと見なすべきだろう。[33]

またマインド・コントロール論では、特に洗脳との比較において、それが物理的虐待や精神的脅迫を伴わない方法であることが強調されるが、実際に挙げられる手法には、睡眠や食事の制限、薬物の使用、特定の場所への監禁、人格攻撃などが含まれ、明らかに説明に矛盾がある。さらにマインド・コントロール論は、こうした手法が施されたこと、それによって精神過程に影響を及ぼされたことを当人が知覚しないと言うが、常識的に考えて、そんなことはあり得ないだろう。

マインド・コントロールの存在を正確に実証するためには、何の動機も関心も持たない人間が、外部からの操作によって特定の思想に回心させられ、しかも本人がこうしたプロセス自体に気づかない、という現象を引き起こす必要がある。とはいえ、そのような現象はこれまで確認されていないし、実験的に再現されてもいない。マインド・コントロール論者はしばしば、自らの理論が「科学」的であり、「再現性」によって裏づけられていると主張するが、それは明らかな虚偽であると言わなければならない。[34]

（3）社会心理学が生み出した幻想が「自家中毒」を起こしているのでは？

最後に、より掘り下げた観点から考察してみよう。確かに、オウム真理教を始めとするさまざまな新興宗教や「カルト」においては、人間の精神を科学的に操作し、それによって短期間で劇的に人間を生まれ変わらせようとする発想がしばしば見られる。そしてこうした現象が存在することによって、「カルトは信者をマインド・コントロールしている」という印象が強められているわけである。

とはいえ、本稿において手短に歴史を振り返ったところからも分かるように、そうした発想を作り出し、社会に広めたのは、何よりも社会心理学自身であった。すなわち、社会心理学の父クルト・レヴィンが「溶解・移動・凍結」というグループ・ダイナミックスの図式を生み出し、感受性訓練、エンカウンター・グループ、ヒューマン・ポテンシャル運動、自己啓発セミナーといった諸実践を通して精神操作の技法が大衆化してゆき、さらには、ニューエイジや精神世界のブームとも合流しながら、多くの新興宗教団体に影響を及ぼしていったのである。

しかしながら、人間の精神を科学的に操作するということは、実際には容易に実現し得るものではなく、現状では「不可能」と言い切った方が、むしろ実態に近いだろう。にもかかわらず、そうしたことがあたかも可能であるかのような幻想が不用意に広まることによって、さまざまな集団精神療法の過激化や暴力化、さらにはカルト化が生じてしまったのである。ゆえに正確に言えば、こうした種類のカルトは、人々が「精神を操作される」ことによって生じたのではない。「科学的な精神操作が可能である」という幻想が広まり、人々が自らそれを信じ込むことによって生じた、と見るべきである。[35]

先に述べたように、社会心理学は本来、自身が提示した図式から数々のカルトが派生してきたことを認め、その原因を明らかにすることにより、幻想の根を断つべきであった。しかしそういったことは行われず、むしろ一部の社会心理学者はある時期から、反カルトの運動に積極的に同調するようになった。そして彼らは、カルトが社会心理学の諸技術を用いてマインド・コントロールしているという、短絡的で責任転嫁的な非難を行い始めたのである。ここに見られるのは、まず片方の手では、「社会心理学の諸技術を用いた科学的な精神操作が可能である」という幻想を作り出してさまざまな団体の「カルト」化

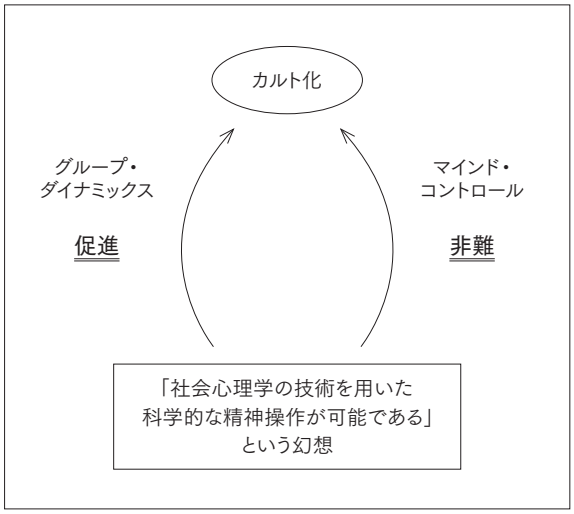

図3　グループ・ダイナミックスという幻想から生まれた存在を、マインド・コントロールという幻想で叩く「マッチ・ポンプ」が生じた。

を促進し、しかし他方、もう片方の手では、その幻想を外部に投影しつつ「カルト」を非難するという、「自家中毒」や「マッチ・ポンプ」と称しても過言ではない構造なのではないか、と考えられる。

マインド・コントロール論の弊害

とはいえ、社会心理学にまつわるこうした「幻想の構造」を指摘してもなお、ある人々は次のように言い張るかもしれない。「カルト」が社会的な悪であることは疑いなく、また、マインド・コントロール論がそれと戦うための何よりの武器であることは間違いないのだから、マインド・コントロール論を批判することは、結果的にはカルトに利することになるのではないか、と。

しかしそのような考え方は、端的に言って誤りである。ある幻想から生まれた存在に対し、それと同水準の幻想を投げ掛けて解消しようとすることは、問題の真の原因を見失わせるばかりか、全体として見れば、その幻想を強化・永続・蔓延させることに繋がってしまう。以下に、弊害として生じると思われる事柄を挙げておこう。

（1）正確な説明の欠如

カルト的な運動は、特定の団体や人物が人々を「マインド・コントロールする」ことによって発生・発展するのではない。実際には、社会内に存在するさまざまな問題に対し、それらを解決しようと、多くの人々が特定の思想や考え方、取りわけ、あまりに単純で偏向したそれを支持するところから生じるのである。[36] マインド・コントロール論は、カルトを攻撃するためのイデオロギー的な武器としての役割を果たすことにより、当初は有用であるかのように思い込まれるが、そうした運動がなぜ生じるのかについての正確な説明を与えないため、一般社会にはその後、いつまでも不全感・不安感が残存してしまう。また、問題の所在を正確に捉えた上で、合理的な対策を講じることも妨げられる。

（2）対話の阻害

マインド・コントロール論は人々に、カルト的な団体と少しでも接触すれば、自分も精神操作されてしまうかもしれないといった、過剰な不安感をもたらす。カルト問題を解決するためには、それが発生した社会的・思想的背景を広く共有しつつ、当該団体と冷静で粘り強い対話を継続することが必要不可欠だが、こうした不安感により、それが不可能になってしまう。また、マインド・コントロールを解くためには、それを受けている場から遠ざけなければならないという理由から、信者を暴力的に拉致する、さらには、「マインド・コントロールを解く」（ディプログラミング）という名目のもとに、長期にわたって監禁・説得する、強制脱会行為がビジネス化する、というケースも引き起こされる。[37]

（3）責任の所在の極端化

カルト的な運動とは実際には、当該団体と周辺社会の複雑な相互作用、並びに、指導者と信奉者の複雑な相互作用から生じる。そのため、ある団体が事件を起こしたという場合には、そのような複雑な影響関係を慎重に解きほぐしながら、個々人の法的・道義的責任を追究してゆかなければならない。ところがマインド・コントロール論に依拠すると、マインド・コントロールした団体が悪い、さらには、その中心にいた指導者が悪いと、責任の所在が極端化し、その後の処遇も著しく不公平なものとなってしまう。

（4）主体性の喪失

信者は、カルト的団体から脱退するときにしばしば、入信の原因を「マインド・コントロールされていた」ことに求めようとする。それによって一時的に自分自身の責任を免れることができるが、それは同時に、自身の根本的な主体性を否定することにも繋がる。カルトから本当に脱却するためには、それに関与したことが自らの主体性に基づくものであったことを認め、自らの主体性においてそこから離れなければならないが、マインド・コントロール論を受容すると、知らず知らずのうちに主体性を喪失すると同時に、すべての責任を当該団体に負わせようとする歪（いびつ）な思考回路が生じる。

（5）被害妄想の乱反射

図4　オウムもまた、マインド・コントロール論を好んで用いていた。上は「悪魔のマインド・コントロール」を特集するオウムの雑誌。

マインド・コントロール論は、「見えない敵が密かに自分をコントロールしようとしている」といった形で、被害妄想的な考え方に結びつく。その基本的なロジックは、実は陰謀論と近似的であり、オカルト的な書籍においては、「権力者が大衆をマインド・コントロールしている」という種類の陰謀論が語られることも多い。カルト側と反カルト側でマインド・コントロール論の応酬となり、被害妄想が乱反射しながら昂進してゆくという現象も生じる。

（6）法秩序の崩壊

裁判で扱われるさまざまなケースにおいて、当人の行動の一つ一つに対し、「マインド・コントロールされていた」可能性を考慮に入れ始めると、審理をスムースに進めることは著しく困難になる。また、そういった理由から犯罪への処罰が減免されるということになれば、個人の主体性に立脚する近代の法秩序は、根底から瓦解することになる。[38]

6　おわりに――受動的・依存的人間像からの脱却

主体性の確立を目指した地道な努力

本稿では、きわめて簡略的ながら、社会心理学の歴史の一側面を辿ってきた。そこに見られるのは、一言で言えば、人間に備わる受動性に着目するスタンスが徐々にエスカレートし、もはや「幻想」と呼ばざるを得ない人間像や諸観念が生み出されるに至るプロセスである。

社会心理学の出発点となったのは、社会システムが複雑化した近代において、人間が主体性を発揮することが難しく、往々にして受動的な存在と化してしまう、ということであった。それ自体はきわめてリアリスティックな認識であり、必ずしも出発点から間違っていたわけではない。社会心理学はそのような視点から、集団状態において人間が見せる諸性質についての冷徹な分析を積み上げていったのである。

とはいえ他方、ある時期から一部の社会心理学は、人間の受動性を巧みに利用すれば、その精神を操作し得るのではないかと考え、グループ・ダイナミックスに基づくトレーニング法を提唱し始めた。さらにはその発想を一八〇度裏返し、カルトがマインド・コントロールという技法を用いて密かに人々を操作している、と声高に警告するようになった。それらの理論においては、人間の自律性や主体性の占める余地が根本的な位相において捨象されており、人間は集団の力や場の力に支配され、あたかもロボットのように精神を完全にコントロールされてしまう、とさえ見なされる。ここまで来るともはや、現実離れした極論と言わざるを得ないだろう。

本来われわれが目標とすべきことは、近代の人間が受動的・依存的になりやすいという事実を認めた上で、さまざまな困難を乗り越えながら、そこから脱却する方途を見出すことにあったはずである。[39] そのためには、周囲からいかなる影響を受けようとも、最終的には自ら考え、自ら決定・行動し、自ら責任を取るという、主体性の原理の重要性を強調し続けなければならないし、同時に、幻想的な思考回路を批判的に退けるために必要となる、幅広い見識を習得する努力を怠ってはならないだろう。われわれは自らの言動が、果たして人々の自律性を賦活（ふかつ）する方向に働いているのか、あるいは、自我の放棄の快楽、依存への耽溺に誘う方向に働いているのかを、慎重に自己点検するところから始めるべきではないだろうか。

注

1　大田俊寛「残存し続ける「私刑」体質　日本社会はオウムの総括に失敗」を参照。とはいえ、マインド・コントロール論の位置づけに関しては、その後に社会心理学の歴史を研究し直すことにより、少なからず理解に変化が生じたことを注記しておく。

2　マインド・コントロール論を主唱する社会心理学者の西田公昭は、「オウム真理教の犯罪行動についての社会心理学的分析」という論文を著しているが、私にはこれは、オウムにおける修行や帰依の具体例を、「心理操作」という言葉を用いながら再説するに留まっているようにしか思われない。

3　オウム真理教においては、地下鉄サリン事件後の一九九六年にも、「観念崩壊セミナー」という修行が実践された。また統一教会も自己啓発セミナーのプームから影響を受け、「ハートクリエイション・セミナー」という催しを開いていた（自己啓発セミナーと各種の新宗教の関係については、福本博文『心をあやつる男たち』二二三－二二四頁を参照）。

4　こうした現象は一見したところ、指導者が群衆を一方的に支配し、服従させているように見えるが、実際にはそうではないことに注意する必要がある。群衆はむしろ、自らの意志で自らの自由を捨てる。さらには、自らの意志で指導者に服従・依存するのである。

5　この箇所の記述は主に、吉田道雄『実践的リーダーシップ・トレーニング』四－一三頁に依拠した。

6 クルト・レヴィン『社会科学における場の理論』一八八、二二九頁を参照。

7 クルト・レヴィン『社会科学における場の理論』二二三–二二四頁。

8 クルト・レヴィン『社会科学における場の理論』二二四頁。

9 A・J・マロー『クルト・レヴィン――その生涯と業績』三七四–三八〇頁を参照。

10 関計夫『感受性訓練――人間関係改善の基礎』第二章を参照。

11 R・シロカ他編『グループ・エンカウンター入門』三頁。

12 アタック・アプローチは、麻薬常用者の自助団体「シナノン」において盛んに用いられた。そして同団体はその後、一部のメンバーの神格化、閉鎖的なコミューンの形成により、「カルト」化したことでも知られる。

13 日本語では一般に、「潜在能力開発運動」や「人間性回復運動」と訳される。

14 W・T・アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』七四頁を参照。

15 チャールズ・マンソンは、シャロン・テート殺害事件を起こす数日前にエスリン研究所を訪れ、即席のコンサートを行っていた（W・T・アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』二三三–二三五頁）。また、リチャード・プライスはラジニーシの教えから多大な影響を受け、またラジニーシの側でもエスリン研究所から多くを学び、同教団の活動には、エンカウンター・グループやゲシュタルト療法が取り入れられた（同書二九六–二九九頁）。

16 エアハルトの経歴については、W・T・アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』二四九–二七一頁を参照。

17 「マインド・コントロール」という言葉がいつどのように現れたのか、現状では正確なことが分からないが、少なくともこれは、その言葉が用いられるようになった初期の例の一つである。すなわち、現在のような「カルトが駆使する怪しげな精神操作法」といったネガティブな意味ではなく、「潜在能力を引き出すためのトレーニング法」という自己啓発的でポジティブな意味合いが与えられていた。日本における感受性訓練の展開については、福本博文『心をあやつる男たち』、自己啓発セミナーの構造や関連事件については、二澤雅喜・島田裕巳『洗脳体験〈増補版〉』、米本和広『教祖逮捕――「カルト」は人を救うか』に詳しい。

18 大田俊寛「我々は「カルト」とどう向き合うべきか？」を参照。

19 津村俊充「自己啓発セミナーとマインド・コントロール――Tグループを用いた人間関係トレーニングと似ても非なるもの」においては、本稿で論じたような主題が扱われているが、全体として感受性訓練（Tグループ）の擁護論となっており、根本的な問題の指摘には至っていない。

20 本稿の注17を参照。

21 マインド・コントロール論に対する理論的批判として、渡邊太「洗脳、マインド・コントロールの神話」がある。また、同理論がカルト信者の拉致監禁という暴力行為を頻繁に引き起こしたことに関しては、米本和広『我らの不快な隣人――統一教会から「救出」されたある女性信者の悲劇』に詳しい。

22 ロバート・リフトン『思想改造の心理――中国における洗脳の研究』二五三頁。

23 当時は西側諸国でも、東側の「洗脳」に対抗するため、科学的な精神操作の手法が模索された。CIAが主導した「MKウルトラ」というプロジェクトについては、ハービー・M・ワインスタイン『CIA洗脳実験室――父は人体実験の犠牲になった』に詳しい。同プロジェクトにおいては、強制隔離、電気ショック、LSD投与などによる精神操作が試みられたが、いずれも成功せず、水面下で多数の被害者を生むに至った。

24 渡邊太「洗脳、マインド・コントロールの神話」二一〇頁、米本和広『我らの不快な隣人』二七一–二七三頁を参照。

25 スティーヴン・ハッサン『マインド・コントロールの恐怖』一〇九頁。

26 スティーヴン・ハッサン『マインド・コントロールの恐怖』一〇九頁。

27 スティーヴン・ハッサン『マインド・コントロールの恐怖』一〇九頁。

28 スティーヴン・ハッサン『マインド・コントロールの恐怖』一二八–一三八頁。

29 西田公昭『マインド・コントロールとは何か』五七頁。

30 西田公昭『マインド・コントロールとは何か』一七四頁。

31 ハッサンの書物を邦訳したキリスト教神学者の浅見定雄は、『新宗教と日本人』一六三–一七三頁において、こうした議論を展開している。ちなみに彼はここで、統一教会が「悪いマインド・コントロール」を用いていることを批判する一方、「マインド・コントロール」や「悪いマインド・コントロール」に該当する行為が、自分が属しているキリスト教会にも見られることを指摘し、反省を促している。真摯な自己批判的姿勢であることに疑いはないが、率直に受け止めれば、統一教会のみを「カルト」と名指す論拠が消滅してしまう。早くも理論自体が綻びを見せていることを指摘しないわけにはゆかないだろう。

32 通俗的なマインド・コントロール論においては、「カルトはあなたの心の隙を狙ってマインド・コントロールしてくる」と語られることが多い。しかしこれは、事態の因果関係を正確に捉えた言説とは思われない。というのは、ここで「心の隙」と言われているものこそが本人の主体的動機であり、十分に自覚されていなかったにせよ、「カルト」的な思想や人間関係を求める心性が本人に内在していたと考えられるからである。何も一方的にコントロールされたというわけではない。

33 実は当のハッサンでさえ、厳密には「マインド・コントロールされて統一教会に入信した」わけではない。彼は青年期から一般社会の価値観に疑いを抱き始め、G・I・グルジェフやP・D・ウスペンスキーといったニューエイジ系の宗教書を読むことに耽溺し、霊的に進歩した人から教えを受けることを切望するようになった。彼はそうした探求の過程で、統一教会に出会ったのである（『マインド・コントロールの恐怖』三五–三六頁）。統一教会の勧誘方法

34 に「偽装」という問題があったことは確かだが、その信仰をもっとも強く支えていたのは、ハッサン自身の宗教的探究心であったと捉えるのが妥当だろう。

35 社会心理学において実験や実証が試みられているのは、マインド・コントロール論を構成している個々の心理技法に対してだけであり、マインド・コントロールの過程全体が実証されているわけではない（私自身は、マインド・コントロール論のみならず、社会心理学全般に疑似科学性が蔓延している印象を受けるが、そのことはここでは措く）。西田公昭は「オウム真理教の犯罪行動についての社会心理学的分析」一七四頁において、「心理学的には、これらの拘束力が並列ではなく、システムを成して直列的に個人に影響を与えたとしたら、それは極めて強力に作用すると予測できると思われる」と述べる（傍点は引用者）。すなわちこれは一つの「予測」（かなり不確かな、おそらくは誤った予測）に過ぎず、直接的・客観的に実証されてはいない。

36 一例としてオウムに即して言えば、それはまさに、「精神操作幻想に取り憑かれたカルト」であった。ところがマインド・コントロール論はこれを、「精神操作するカルト」と捉えてしまった。小さな差異であるかのように思われるかもしれないが、これは意味合いがまったく異なっており、まさに致命的な誤認であったと言わざるを得ない。

37 皮肉なことだが、多種多様な社会問題をグループ・ダイナミックスの実践によって解決できる、さらには、宗教やカルトの問題をマインド・コントロール論で解決できると考えた一部の社会心理学も、こうしたケースの一つに数えざるを得ない。

38 こうした事例や問題については、米本和広『我らの不快な隣人』、室生忠編著『大学の宗教迫害』に詳しい。

39 オウム真理教や統一教会のケースを含め、これまでの裁判においては、しばしばマインド・コントロール論が持ち出されたが、管見の限りでは、それが有効な論拠と認められることは一度もなかった。世の中にさまざまな「カルト」が生み出されるもっとも根源的な原因は、精神支配の技術が巧みに駆使されているということではなく、個々人の内面に潜む「依存症」的心性にあるのではないか、と私は思う。

主要参考文献

浅見定雄『新宗教と日本人』晩聲社、一九九四
アンダーソン、W・T『エスリンとアメリカの覚醒――人間の可能性への挑戦』伊東博訳、誠信書房、一九九八
大芦治『心理学史』ナカニシヤ出版、二〇一六
大田俊寛『オウム真理教の精神史――ロマン主義・全体主義・原理主義』春秋社、二〇一一
大田俊寛「我々は「カルト」とどう向き合うべきか？」（『日経ビジネスAssocié』二〇一二年七月号所収）、日経BP社、二〇一二
大田俊寛「残存し続ける「私刑」体質　日本社会はオウムの総括に失敗」（『Journalism』二〇一八年四月号所収）、朝日新聞社ジャーナリスト学校、二〇一八
カント、イマニュエル『実践理性批判』中山元訳、光文社古典新訳文庫（全二巻）、二〇一三
シロカ、R他編『グループ・エンカウンター入門』伊東博・中野良顕訳、誠信書房、一九七六
関計夫『感受性訓練――人間関係改善の基礎』誠信書房、一九六五
関計夫『続感受性訓練』誠信書房、一九七六
津村俊充「自己啓発セミナーとマインド・コントロール――Tグループを用いた人間関係トレーニングと似ても非なるもの」（『現代のエスプリ』三六九号所収）、至文堂、一九九八
西田公昭『マインド・コントロールとは何か』紀伊國屋書店、一九九五
西田公昭『「信じるこころ」の科学――マインド・コントロールとビリーフ・システムの社会心理学』サイエンス社、一九九八
西田公昭「オウム真理教の犯罪行動についての社会心理学的分析」（『社会心理学研究』第一六巻第三号所収）、日本社会心理学会、二〇〇一
ハクスリー、オルダス『すばらしい新世界』黒原敏行訳、光文社古典新訳文庫、二〇一三
ハクスリー、オルダス『知覚の扉』河村錠一郎訳、平凡社ライブラリー、一九九五
ハッサン、スティーヴン『マインド・コントロールの恐怖』浅見定雄訳、恒友出版、一九九三
ハッサン、スティーヴン『マインド・コントロールからの救出――愛する人を取り戻すために』中村周而・山本ゆかり訳、教文館、二〇〇七
福本博文『心をあやつる男たち』文春文庫、一九九九
二澤雅喜・島田裕巳『洗脳体験〈増補版〉』宝島社文庫、一九九八
フロム、エーリッヒ『自由からの逃走〈新版〉』日高六郎訳、東京創元新社、一九六六
マロー、A・J『クルト・レヴィン――その生涯と業績』望月衛・宇津木保訳、誠信書房、一九七二
室生忠編著『大学の宗教迫害――信教の自由と人権について』日新報道、二〇一二
吉田道雄『実践的リーダーシップ・トレーニング――元気で安全な組織づくりの基礎とノウハウ』メヂカルフレンド社、二〇一一
米本和広『教祖逮捕――「カルト」は人を救うか』宝島社、二〇〇〇
米本和広『我らの不快な隣人――統一教会から「救出」されたある女性信者の悲劇』情報センター出版局、二〇〇八
ル・ボン、ギュスターヴ『群衆心理』桜井成夫訳、講談社学術文庫、一九九三
レヴィン、K『社会的葛藤の解決――グループ・ダイナミックス論文集』末永俊郎訳、東京創元社、一九五四
レヴィン、クルト『社会科学における場の理論』猪股佐登留訳、誠信書房、一九五六
レヴィン、K『パーソナリティの力学説』相良守次・小川隆訳、岩波書店、一九五七
リフトン、ロバート・J『思想改造の心理――中国における洗脳の研究』小野泰博訳、誠信書房、一九七九
ワインスタイン、ハービー・M『CIA洗脳実験室――父は人体実験の犠牲になった』苫米地英人訳、WAVE出版、二〇一〇
渡邊太「洗脳、マインド・コントロールの神話」（宗教社会学の会編『新世紀の宗教――「聖なるもの」の現代的諸相』所収）、創元社、二〇〇二